
大晦日特番「Narou/Zero」

アベンジャー（残骸）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大晦日特番「Narou/Zero」

【NZコード】

N6470Z

【作者名】

アヴァンジャー（残骸）

【あらすじ】

ザ・カオス！

大晦日に次元世界最大の混沌が巻き起こった！

(前書き)

初めに謝罪しておきます、私の筆が荒ぶつた結果異様に長くなりました。orz

まさかの22000字オーバー……

皆様、心して御覧下さい 何様

P・S・本作には以下の方が以下のキャラを提供して下さいました！

皆様、本当にありがとうございます！

・sufiaさん

『天童綾人』

・U・Tさん

『クラウド=ストライフ』

『ザックス=フェア』

・ああああああああああーさん

『セロ=スクライア』

『ザラツク』

『トリニル＝オズマ』

・アマネ・リイラさん

『ファイム＝ララウ＝イ』

・いかじゅんさん

『ヒナギク』

・イツキさん

『コルト＝リバティ』

『ブルズ＝アルフィード』

・カイルさん

『シユウ＝ヤマト』

『レイース＝ザラ』

『ケイ＝アスカ』

『ルチア＝ルミナス』

・カガヤさん

『クロスロード＝ナカジマ』

『ノア』ナカジマ

『萩城瑠樹』

『九柳哲』

『東光院怜』

・テラ吉さん

『タクヤ』D=アルバトロス

・ぱつあんさん

『シキ』K=アスタークト

・暁 零さん

『天戸翔』

『蒼月竜哉』

・黒雨 蓮さん

『夜川泰子』

『朝霧白』

『氷堂心愛』

・神崎はやてわん

『リオス=コーネルド』

『エルト=クリーバー』

『ソフィア=ジュリーストン』

『レーネ』

・赤黒さん

『ユウ=クロサキ』

・鮮血の刻印さん

『ヴィレイサー=セウリオン』

『セレーネ』

皆様、ありがとうございました！

ミシードルダ第3スタジオ

ルナマリア &メイリン 「いんばんはーーー！」

ルナマリア 「いやー、今年も後僅かねえ……」

メイリン 「やうだね」

ルナマリア 「今年は震災に節電にトヨタに〇〇〇にAGEに〇〇〇
に……色々あつたわよね……」

メイリン 「うんうん色々……つて他は兎も角ハリつて何ー？ そ
んなの無かつたよねー！」

ルナマリア 「嫌ねメイリン。 ナデシコ Nadeshiko Japan に決ま
つてるじゃない」

メイリン 「そんな略し方今初めて聞いたからね！ つて書つか無い
からそんな言い方！」

ルナマリア 「そりゃそうよ。今作つたんだもの」

メイリン 「ウザインですけど」の人…」

ルナマリア 「ウザイ位キャラが立つてないと忘れられるんだもの、
ウザくもなるわよ」

メイリン「確かにキヤラが薄いよりは濃い方が良いけどね。最近のアニメにも言える事だけど、その作品のオリジナリティが分からぬ物もあるしね」

ルナマリア「その点行くと私達は完璧よね。こんなにモノアイと私のみりきを宣伝してる作品は他に無いもの」

メイリン「それを言つなら魅力だよね。^{みりょく}と言つか真似されないのは誰も真似したくないからってだけだし」

ルナマリア「嘘だッツッ！…！」

メイリン「本当だッツッ！…！」

ルナマリア「アレがそんな評価を受けてるハズがありませんー。される方達から高い評価を受けてるのがその証拠ですぅー」

メイリン「でもアクセスはまだ5万にも到達してませんー。ちよつと頑張った短編レベルですぅー」

ルナマリア「そんな短編ありませんー」

フラメ（司会者席）「オイ好い加減にしろお前ら。話が先に進まないだろうが」

ラクス（司会者席）「困りましたわね……では收拾が着くまでの間、Fateシリーズについてのトークをする方向で話を」

フラメ「いや話題がManiac過ぎるだろ。着いて来られないGuestや視聴者を放置するなよ」

ラクス「では何の話題なら宜しいのでしょうか？」アフナー辺りですか？」

フラメ「それは メトークでやれよ。と言つか Guest が着いて来られないだろが」

ラクス「何時も『知らないからしょうがない』と言つ姿勢には問題があるかと思いますが」

フラメ「分かるけどそれも場合に因りけりつてヤツだよ。今回はウチの馬鹿作者がした、厚かましい要請に応えてくれた作者一同への恩返し的な意味もあるんだ。極力分かるネタで行くのが筋つてモノだろ？」

ラクス「まあ、一理ありますわね」

フラメ「取り敢えずそろそろ Guest を呼ばないといけないし、あの馬鹿2人の漫才を止めるとするか」

ラクス「お任せしましたわ。その間私は『三田出版の毒舌講座～リア充爆発しろ～』を読んでいますので」

フラメ「いや、 Guest を迎え入れる準備をしきよ」

ルナマリア「そもそも私は色んなガンダムシリーズのゲーム作品に出演してるでしょ。『レは私に人気があるって事じゃない』

メイリン「アレ全部シンのバーターじゃない。『シンが出るからついでにお姉ちゃん出しひけば良いか』みたいな発想なのは一目瞭然

だよ」

ルナマリア「そんな訳ありません。EVSでは低コストだから
じょんじょん使われてますうー」

メイリン「代わりに誤射しまくって評価をズンドコ下げるけどね」

ルナマリア「アレは私じゃなくてゲームが悪いのよー。狙った所に
撃つても何故か味方に当たるんだものー」

メイリン「嘘せん聞きましたかー？」この姉は『私を差し置いて』
出演した上に、『自分の射撃の下手さ』を『ゲームシステム』のせ
いこしましたよー」

ルナマリア「本当にそつなんだつてばー。でなきゃ私がGは兎も角
自分のコレクションを墜とす訳無いでしょー。」

メイリン「待つてお姉ちゃん、今激しくおかしい台詞が聞こえたん
だけど。一体どーいう事?」

ルナマリア「発売まで口止めされてたんだけど、あの作品に出てる
モノアイムは」

(2人を爆発が襲つ)

フラン「お前ら、尺を少しほ考える。折角の私のTalk on
stageまで潰すとかさあ」

メイリン(無傷)「済みません、つい熱くなつて」

フラメ「何時の間に回避したんだよ……」

マイリン「まあそこには主人公補正と言つ事で」

フラメ「何か釈然としないけど、それで納得するしか無さそうだね。
それじゃあ今日のGuest、Come on!」

(音と大量の紙吹雪に呑わせてゲストがスタジオに入場)

フラメ「多いね……」うつして見ると「マジで」

リオス（紙吹雪を避けながら）「うん、多いね。……紙吹雪が」

マイリン「スタッフさん！ ちょっと紙吹雪が多いですよ！……」

ルナマリア（包帯ぐるぐる巻き）「ぎこちやああああッ！」

ヴィレイサー＝セウリオン「おい、約1名がドカ雪の如く降り注ぐ
紙吹雪の下に埋もれたぞ」

マイリン「お姉ちゃんならスルーして頂いても大丈夫ですよ」

朝霧白（あさぎり・はく）「何でぞんざいな扱いなのですか……。ギャグマリアの2つ
名は伊達では無いのです……」

セレーネ「アレがマスターの教えてくれたアクション芸人なんです
すね……」

夜川泰子（よしかわ・たつき）「あれ程悲惨な扱いの主人公もそうはないな」

氷堂心愛「珍しいので写真を撮つておきましょ。皆に見せびらかして新年会の話のタネに」

白「鬼が口にいるのです！」

レイオス＝ザラ「なあケイ、アレ助けた方が良いんじゃないのか？」

ケイ＝アスカ「大丈夫でしょう。あの人の知つてる御先祖と違つてしまふとさが異常だから」

ラクス「まあ的確な御指摘」

リオス＝コーネルド「いや、皆助けよう！ 縛ら何でも可哀想だつて！」

エルト＝クリーバー「やれやれ、世話の焼ける……」

（ルナ・マリアを紙吹雪の中から引き摺り出す）

九柳哲「こりゃ人工呼吸が必要だな……。と言つて俺がじいででででで……怜い……腕はそんなに柔軟に曲がらないがやあああッ……！」

東光院怜「アンタつてヤツは、ドサクサに紛れて何やうとしてんのよ！ 今度と言つ今度は覚悟しなさい……！」

ザックス＝フェア「何と言つが、カオスだな……」

クラウド＝ストライフ「（フラメの方へ顔を向けながら）フラメ、早く番組を進めた方が良いんじゃないのか？ このままだと何一つ

始まりずに新年にな……」

タクヤ＝D＝アルバトロス「へえ、そいつはcrazyなDaddyだな」「

フラメ「だろ？ 私用に学校貸し切つて1人入学式とか飛び過ぎつて話でさ。つか実家に帰ると未だに風呂に一緒に入ろうとするんだよ」

タクヤ「Hii～ そいつは筋金入りだ」

クラウド「……ザックス、俺は呼ばれてる気がするから行つて来る」

ザックス「呼ばれてるって何にだ！？ 鳥賊か！？ 鳥賊になのか！？ 戻つて来いクラウドおおおおおッ！！！！！」

ラクス「成程……。『肉はトコトン弄つて泣かせろ』ですか……」

ルチア＝ルミナス「あの、その本見せて頂けませんか？」

ラクス「ええ、宜しければこちらの布教用をどうぞ」

(暫くお待ち下さい)

フラメ「さて、皆が席に着いた所で始めるのは……『レだー』

(大型モニターに種目が表示される)

ラクス「亞留帝滅斗・苦威頭～戦わなければ生き残れない～」
アルティメット クイズ

ゲスト全員「ちょっと待てえ————！」

フラメ「What's? 椅子の座り心地が悪かったか?」

レーネ「What's? じゃないわよ! 何この物騒極まり無いタイトル! 確実に人死に出しそうじゃない!」

フラメ「落ち着けって。まだRuleを説明してないだろ? He at upするのは、それからでも遅くないんじゃないか?」

レーネ「そ、それもそうね……」

フラメ「つて訳でメイリンにルナ、頼む」

メイリン「ハイハイ このクイズでは、まず皆さんに予め伝えてある組み合わせでチームを組んで貰います。それからそのチームで、私達の出すクイズに答えて頂きます」

ザックス「何だ、タイトルの割に普通のクイズだな」

萩城瑠樹「だな……物騒な当て字がしてあるから身構えただけど

ルナマリア「ココからが大事よ。この『苦威頭』は形式こそ良くあるクイズに見えるけど、一つ違う所があるの」

タクヤ「一つ違う所?」

ルナマリア「それは……」いつづき（指を弾く）

（何も起きない）

怜「ねえ、何も起きないんだけど…………」

ルナ・マリア「あ、アーレ、ちょっとヒト、かほんジヤー、じ一皿の事よ
！ 打ち合ひわせと連びがしない！」

メイリン「え……？ あ、はい。お姉ちゃん、駄作製造機から伝言
だつて」

「ルナマリア」は？ 伝言？

メイリン「『トレミー』なう。超電磁砲のゲームの限定盤と新しいPSP買って、オフ会に参加したせいで金欠になつて持ち合わせが無いから例のザクの件は無しつて事で頼むわ」だつて。……流石は逆赤版ラクス様の性格モデル

心愛「何と言つ裏事情」

白「と言うかあの人、番組の予算を何に使つてるのですか！」
苦茶趣味丸出しな横領してるのであります！」

泰子「まあ彼は後で逮捕するとしてルナ。 一体どういうルールなん
だ?」

ルナマリア「あ……ゴメンなさい。えっと……簡単に言うとこのクイズに答える前に、皆にはまず手元のスイッチを押して貰います」

(ザックーン)

ルナマリア「そうすると」「こんな音が出るから」

セレーネ「何ですか今のは……」

白「予算不足の理由が分かつたのです」

ケイ「そんな所にお金掛けたらどうなるよなあ……」

ルナマリア「こんな音がしたら……」「……」

哲「ツツ」「ミ無視！？」

怜「ルナ、今完璧テンパってるわね」

ルナマリア「こんな音がしたら一先ず回答権その1を手に入れた事になるからね、ね……（カンペを見る）」「

ザックス「いや、そこ暗記しどけよ」

ルナマリア「ゴメン、さつきのザクショックで覚えてた段取り全部飛んだから」

レーネ「ポンコツ過ぎるでしょ！…てかザクショックって何！？ザクで何をする心算だったのよ！」

ルナマリア「（カンペを見ながら）えーと……、そうなつたら各チームは1人ずつ代表を選んで前に出して。そのメンバーに野外のステージでして貰うゲームで1番良い成績を上げた人のいるチームがクイズに回答する事が出来る様になるから」

クラウド「随分手間の掛かるやつ方だな

ラクス「クイズだけだと頭だけになりますでしょう? それでは偏りがあるので、こちらで体力もと思い追加したのです

クラウド「成程

レーネ「ザクで何をする気だつたのよおおおッ!!」

フライメ「(大型モニターを展開しながら) 因みにそのGameが…」「アレだ!

(1)(ワン)(2)(ツ)(3)(スリー)(一)

リオス「今の効果音、凄い聞き覚えがあるんだけど」

ヴィレイサー「ああ。『2』が何故か凄いエゲ声だったが、間違い無くあの番組のアレだな」

シユウ=ヤマト「(ステージ中央を指差しながら) ハハハとばかりにネタを盛り込んでますね……つてそれよりアレ!」

白「!」、心愛さんに泰子ちゃん、アレは何なのでですか?」

心愛「アレは……!」

泰子「知っているのか心愛!?!?」

哲「また古いネタで来たな

心愛「アレは伝説の凶技と恐れられた『殺須氣（スケ）』。多くの挑戦者を迎える、そしてその狂気に因つて葬り去ったと言ひ呪われし儀です……！」

白「そんな恐ろしい物……！ 対策はあるのですか…？」

心愛「今の所2つあります。1つは挑戦して尚生き延びた数少ない踏破者であるケンに英にんに君……基伝説の3筋肉と謳われる『黒忍・磁雷弥』に『銀河の青獣』、そして『きん君』の技術を模倣し切り抜ける事」

ザックス「ちょっと待て。その最近観ないメンバーはアレを踏破してないだろ。単に名前が有名なだけだろ」

ソフィア＝ジュリーストン「本当に……今何処に行つたんだろ、照」

セレーネ「マスター、きん君なら最近一緒に見ましたよね？」

ヴィレイサー「いや、人違いだろ。あんな所をあんな感じの芸人が歩くハズは無い」

リオス「取り敢えず、今ニジャブツクヤンガルーとかの所在は確認しなくて良いと思う」

白「それで心愛ちゃん。2つ目の策は何なのですか？」

心愛「簡単な事です。それは

「

白「それは？」

心愛「（集中線付きで）白さんが、私との婚姻届にサインをする事ですッ！……！」

白「全く『殺須氣』と関係無いのです！！！ と言つか何度も活動報告で言つている様に、白と心愛しやんは結婚出来ないのです！」

心愛「無理を通せば法律と言う道理なんて引っ込むと、某書房で山田丸の船長も述べています」

白「誰なのですか、そんな無茶苦茶な本を書いたのは！」

その頃、チームA

瑠樹「……取り敢えずあつちは置いといて真剣に対策を練ろう」

怜「そうね……結構洒落にならない仕掛けばっかりだし」

タクヤ「問題は、アレの難易度の基準がフランメ基準だつて事だな」

哲「あの子、敵幹部の中で一番速くて目が良いつて話だつたな。個人的には胸もつじがらッ！」

怜「何処見でんのよこの馬鹿！ 天誅！（肘鉄）」

瑠樹「（スルー）道理での刺付き鉄球が残像を見せる程の往復速度な訳だ……。正直一般人の俺達には無理だな。タクヤはどうだ？」

タクヤ「ちょいとぱつかしHardな仕掛けだが、まあ限界まで力を振り絞ればどうにかなるかもな。久し振りにマジになるか……」

怜「無理はしないでよ。いざとなればギブアップしても構わないか

「ひ

タクヤ「Thank you. けど、□□で退いてちゃ今後やつて
けそうにないからギリギリまでやつてやる」

オルフェイス×Buddyx、「させなら盛大にブツ放してあの女の
間抜け面でも揃んでもうひげ」

タクヤ「OK! It's showtime! Yaha!」

チームB

シユウ「あつちは予想通り、か……」

ヴィレイサー「まあ、妥当な線だな」

レーネ「それで、アンタ達自信はあるの?」

シユウ「仕掛けが今姿を見せている物だけなら、五分と五分って所
かな」

ヴィレイサー「フレームの事だ。別の仕掛けも隠していると見て間違
い無いだろう。アイツはあの手の悪戯には手を惜しまないからな」

レーネ「その気力を仕事に向けるつて発想は無いのかしづ」

ヴィレイサー「それがあれば、俺がアテルの愚痴を聞く回数は今
20分の1になってるよ」

セレーネ「全く……、シンントンをここに困つたモノですよね」

ヴィレイサー「ああ……。アイツは可愛いのに顰めつ面ぱつかりだし、本当の事がひとつ顔真つ赤にして平手打ちするし……」

セレーネ「私はあの人と違つてそんな事しませんけどねー」

レーネ「はいはい分かつた分かつた。それで、結局どつちが出るの？」

ヴィレイサー「俺が出すよ。アイツのやつ口は大体把握してるからな」

レーネ「頑張んなさいよ。負けたら許さないんからね！」

ヴィレイサー「（わざと恭しく礼をしながら）愚まつました、レーネ様」

チームC

白「す、すっかり要らない時間を取つたのです……（肩で息をしながら）」

心愛（気絶中）

エルト「僕が押さえ込むのに苦労するなんて……」

ソフィア「コレが愛の力なんだね……」

エルト「今の光景を見て何故その感想が出たのか気になるんだが……」

白「エルトちゃん！ そんな事より早くバインドして欲しいのです！ 心愛ちゃんをきつちり縛つておかないと……」

エルト「あ、ああ……」

心愛「う、うーん……ハツ！ ピ、コレはー（ぐるぐる巻きで椅子に結わえ付けられてくる）」

白「もう田が覚めたのですか！？」

心愛「愛は偉大なのです」

白「尤もらじい名言を使わないで欲しいのです！」

エルト「2人は放置するとして……そろそろ行つて来る。ソフィア、後は任せる」

ソフィア「分かつたよー 気をつけねー」

チームD

レイトス「それにしても、まさか1発田からあんな物を繰り出して来るとは……」

ザックス「フレームの性格と能力ならやりかねないとは思っていたけど、アレは全力でやられると得ないな……」

レイトラス「それもそうだが、クイズも難しいんじゃないかな? フラメは色んな世界を渡り歩いてるそうだから知識はあるだろうし、ラクス様達だってMSにはかなり詳しいハズだから……」

リオス「ラクスは何か他の方向の知識も得ているみたいだしね……」
(汗)

レイトラス「……やうだな。俺達の知つているラクス様と違い過ぎだよ……」

ザックス「まあ、分かる範囲の物を答えて行けば良いさ。2人共頼んだぜ」

リオス「うん!」

レイトラス「ああー!」

チームE

泰子「凄まじい仕掛けだな……」

ルチア「そうですね……。こんな物が世の中にあるのかと、そう感じてしましました」

ケイ「MSの戦いは慣れましたけど、このと向き合つとは思いましたよ。世界は広いですね……」

クラウド「あそこには並んでいるMCJや番組の総指揮を取るアヴィエンジャーの性格を考えると、更にエスカレートすると考えて良いだろうな」

ルチア「アレ以上、ですか……？ 想像が付かないですね……」

クラウド「それが普通だ。アイツらの行動は、常に常識の範疇を超える。……力を抑えながらと黙つのは、やはり厳しいか……」

泰子「だろうな。だが、見せ過ぎて底を知られるのも得策とは言えん。加減は厳しいが、そこは君の技量に任せるとするよ」「ねえすくい

ルチア「無理はしないでトセイ」

クラウド「ありがと。……行つて来る」

20分後、司会者席

フライメ「ふえるふあるふあふいまつふあみふあいふあふえ（訳：出るヤツは決まったみたいだね）」

ラクス「ほもほづへふはふえ。ほふあふあふあ、ふあふひひふあふふえふえふいふえふあひふおひふえふ（訳：その様ですわね。皆様、やる氣に溢れていて何よりです）」

メイリン「2人共喋るか食べるかどっちかにして下さい！ って言うか何ですか！ このフライドポテトに掛かってる塩の量は！？ そもそも仕事中だし！」

ラクス「皆様がメンバーを選んでいる間は、私達は手持ち無沙汰ですし。何よりオールナイトの企画である以上、出来る時に休んでおかないと」

フラン「やつこい事だ。それに塩付けないと食べた気がしないだろ
?」

マイリン「にしても山盛りは無いですよ! 身体壊しますって!」

フラン「大丈夫だ、戦つて汗搔いて流すから」

ラクス「私も久し振りに自分のインフィニットジャスティスで無双
しようとしておりましたし」

マイリン「迷惑過ぎる!」この人達本当に迷惑過ぎる! でも、随
分早くメンバーが決まりましたよね

フラン「まああのLevelのAttractionなら参加可能
な面子は絞られるからね。マイリン、Quinnの準備は出来るか
?」

マイリン「はい。そつちは完璧です。お姉ちゃんにクイズの問題を
書いた紙を持つてるかどうか確認しましたし」

フラン「OK、Perfectだね。それじゃあ、今から始めるよ

マイリン「皆わん、準備は出来ましたかー?」

ゲスト全員「オオーーーツ!...」

ラクス「それでは、第1問です!」

ゲスト全員「ゴクツ……」

ルナ・マリア「私の愛用しているMS「コレクションの中でも、足回りが一番綺麗なのはどのMSで……」

全員「ちょっと待てえええええッ！――！」

ルナ・マリア「（小首を傾げて）？ 何？」

マイリン「わやんと紙を持つてると想つたらあー！ そんなのお姉ちゃんの匙加減だからあーーーーー！」

ルナマリアー 嘘オ！？ フロケでも散々書いたのに！」

「お姉ちゃんが思ってる程皆あのフロ
メイリン見てないからね！」
グ見てないから！」

ラクス一眞さん、申し訳ありません。私が代わりに問題を出します。
えー……御馴染アイテムの……」

メイリン「ストップストップストップ！－！」
みたいに用語を出してるんですかー」

ラクス「コレは最近の社会人の常識でしょ、う？」

マイリン「違いますからーーー！」

アーティストがああもう戻るよ。私が問題を出すから」

マイリン一頼みますよ……」

フラン「私がこの間ふらつと行つて滅ぼした次元せ」

(暫くお待ち下さい)

マイリン「（血の付いた金属バットを持つつモニターを開いて）
「ホン。……お騒がせしました。と訳で私が問題を

ゲスト全員（真剣な表情）

マイリン「『禁断の刃』に登場している『武具融合』。それで、この漢字は何と読みますか？」

（ザックーン）

ラクス「早いですね……」

ルナマリア「まあ、禁断を読んでくれている皆にはサービスみたいな問題でしたからね……。でも皆早いなあ……」

タクヤ「（振り子の要領で迫る鉄球を避けながら）シチュエー！」

ザックス「（編み込まれた紐を伝つて移動しつつ、下の池から襲い掛かる猛獸を迎撃する）チッ……！」

エルト「（床から突き出す槍を見切りながら）ツ！ 早いな……」

ヴィレイサー「（突き出たスパイクを利用して坂を登りながら）この程度……！」

クラウド「（高速回転する柱を駆け上がりながら）速い……だが……」

タクヤ&ザックス&ヒルト&ガイレイサー&クラウド「オオオオオ
ツ！－！」

(グッフーン)

マイリン「はい、スイッチが押されました！ 押したのは……」

ゲスト全員（緊張した顔）

マイロン「ガイレイサーなんですよー！」

レーネ「毗ヒー！」

マイリン「それではチームBの監督さん、正解をお願いしますー！」

セレーネ&シユウ&レーネ「ウエポン・バルカー！」

マイリン「正解ですー！」

(♪♪♪)

由「拍響ー わやんとするのですー！」

(♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪)

ザックス「じつかで聞いた音だな

クリクス「俺もそんな気がする」

ガイレイサー「メタな台詞は止せ

メイリン「それでは皆さんが“1stステージを突破した”ので、ステージが2ndステージに移ります！」

タクヤ「何……だと……？」

メイリン「2ndステージに移りますので、皆様は近くの転移魔法陣に移つて下さい」

エルト「何処に転移するんだ……？」

メイリン「それは逝つてからのお楽しみですよ（ニラ）（ココ）」

ヴィレイサー「待てメイリン字がおかしい

メイリン「では皆さん頑張つて下さいね～（ポチッとな）」

（転移魔法陣が発動）

怜「メイリン、一体彼らを何処に送つたの？」

メイリン「オールライダーとディケイドが戦争してる所に」

リオス「何してるのでおおおおおッ！――！」

メイリン「（モニターを見ながら）あ、シザースが蹴り飛ばされた。と直つかブライトルバーが足蹴にされてる」

リオス「ディケイドオオオオオッ！――！」

哲「うはあ……」れはひどい

白「と言つた、早速変なに絡まれているのです。」

王蛇「何だお前ら…… イライラさせやがつてへ

カイザ「俺の邪魔をするんだな、お前へ

ヴィレイサー「オイ、何だこのキレる中学生が大きくなつた様な連
中はへ

エルト「喻えが的確過ぎて何も言えないな。取り敢えず正当防衛で
氣絶させるぞ」

フラメ「（頭に出来たタンゴブを押さえながら）あ、取り敢えず第
2問を始めるよ」

白「間違い無くそんな能天気な状況じゃないのです！ 超の付くサ
バイバル状態なのです！」

フラメ「いや、アレが第2問用の殺須氣のStageだからさ。因
みにStage内容は『進行方向にいる悪役Rider + ライオト
ルーパー × 500を倒して、戦場から離れた所に設置したSwitch
onを押す』だ」

怜「それ、最早元ネタ関係無くなつてるわよね。と言つたアトラク
ションですら無いし」

フラメ「細かい事は言いつこ無し、だ。それに進行Routeは平
坦な道じやない。山あり谷ありの起伏に富んだ場所だ。ディケイド

を倒す為に攻撃しまくってる連中の流れ弾だつて有り得る。身体を動かすActionとしてはある意味究極だろ?」

ルチア「一理ありますね

白「無いです!」

ラクス「(スルーしながら)では第2問です。『禁断の刃』で敵幹部の1人として登場した『銃のドンナー』。彼女が使う『聖バロウの守護』は、どんな特殊能力でしょうか?」

(ザックーン)

フラメ「コレまた早いね……

ルナマリア「まあ、序盤で出たネタですしね。まああの頃は駄作製造機が素人過ぎて色々と酷いですけど

メイリン「『自分の中では全て失敗だった』って言つてるし、酷評された箇所もあるしね。まあそれを言つたら他のも大差無いんだけど」

ラクス「自虐はその辺りで止めておきましょう。それより皆さん、凄いですわね

フラメ「だね。ところでラクス。RiderのSignが欲しいって企画の提案中に言つてたけどさ、誰のSignが一番欲しいんだ?」

ラクス「そうですね……、甲乙付け難いのですが……」

フラメ「ふんふん」

ラクス「ティケイドですね」

リオス「無理でしょそれ！ 明らかに話が出来る雰囲気ですら無い
しー」

ラクス「大丈夫ですわ。刹那さんは言葉の通じないE-Sと対話し
たらしいですし」

リオス「一緒にして良いモノじゃないからー」

? ? ? < F . i n a > v e n t >

ソフィア「ねえ、今不穏な音声がモニターの向こうから聞こえたん
だけど……」

ケイ「あの緑色のヤツ……！ もしかして……！」

ヴィレイサー<クッ……煩いヤツ！>

ゾルダ<お前達にかかるつている暇は無い。吹き飛んで貰つへ

タクヤ<That sucks……！ とんだイカレつぶりだぜ……！>

… >

オルフェイス<やつてくれるぜあのF . c . i n g野郎……！ B
udd y! ステージは後回しにして野郎をボコすぞ>

タクヤ「ああ！」

クラウド「クッ……！」

キックホッパー「お前……今相棒を笑つたな……？」

クラウド「別にお前達に興味は無い」

フラメ「Huu~ 良いね」の感じ。Heat upして来たよ

瑠樹「いや、『レボ』のカオスだろ。色々な方面からの苦情がありそうだな……」

ルナマリア「アヴォンジャー、ヤケクソでこの企画立てたから……。と、そういうしてゐウチに到着したみたいね」

ザックス「ハア……、ハア……。キツかつた……」

(ドーン)

ラクス「ではチームロの皆さ、回答をお願いします

リオス&レイトス「過去の自分を現実に投影する『能力』」

(ぱぱぱぱぱぱぱぱー)

ラクス「正解です！」

フラメ「じゃあ、ティケイドの様子がヤバそだしねを戻すよ」

(飛ばされた5人がスタジオに戻つて来る)

ヴィレイサー「（肩で息をしながら）流石に……中々手強い連中ばかりだつたな……」

ザックス「だな……。あんなのと年末に戦うとは思わなかつたぜ……」

ラクス「お疲れ様です、皆さん。取り敢えず1時間休んで下さい」

タクヤ「OK……1時間？」

ラクス「ええ。1時間後に次のアトラクションに挑んで頂くので」

ヴィレイサー「今度は何処に送る気だ？ 次も戦場とは言わないよな？」

ルナマリア「はーい、口上で一日一日でーすー」

ラクス「……さて、CMの間にエルセアのアーテルさんに連絡を取らないと……」

ゲスト全員「誤魔化すな！――！」

なのは「うーん……最近ドカンと撃てないなあ。そんな悩みを抱えている皆さん」

はやて「そんな時はコレや！『スカッター撃』！」

なのは「わあ、何だか凄く効きそうな名前だね！」

はやて「名前だけやないよ。」のドリンクにはスプーンの血にヨジ
テーにマーシム、トセイオツにベアウルの胆にレリック改まで入つ
とる。効果は抜群や！」

なのは「凄いね……。でも、そんなに混ざついたら画いんじやない
の？」

はやて「そんな声にお応えして、1ケース31本が何と9300円
！」

なのは「うわ、安い！」

はやて「更に今ならブルーレイのデッキにアストロスイッチと黒マ
テリアとロトの剣を付けてお値段そのままやー！」

なのは「えええッ！？ そんなに付けて大丈夫なのー？」

はやて「それだけやない。今なら金利手数料から運送費まで全では
やネットが負担するよー！」

なのは「コレは今すぐ電話しないとー！」

戦闘機人達に最大の危機が訪れる！

蟹つぽい怪人「あのわあ、名前変えてくんない?」

スカリエツティ「何でだい?」

蟹つぽい怪人「お宅らの使つてるナンバーズって名前さあ、ウチが資金稼ぎに作り上げた宝くじの名前と被つてるんだよね」

スカリエツティ「むう……本当だ。コレは済まない事をしたね」

突き付けられた現実は亀裂を生む。

スカリエツティ「と、言つて君達は今から『ナンバーズ』改め『モケベルク』だ」

ディエチ「何でそんな名前に……」

スカリエツティ「決まつている。被らないからだよ」

為す術無く窮地に陥る彼女達……だが、希望は失われていなかつた!

チenk「例えドクターの言葉でも、それを認める訳には行かない!」

ウェンディ「アタシ達は、自分が自分である為に……ドクター！アンタと戦うッス！」

セツテ「ドクターに逆らつのなら、容赦はしません」

その亀裂に乘じ、陰謀が動き出す。

ユーノ「コレで僕達の時代が来る……」

クロノ「ああ。ヤツらを倒し、今度こそ主要メンバーに返り咲く。
ユーノ、君の命を僕に預けてくれ」

ミッドチルダを揺るがす波乱の行く末は

?

『コードナンバーズ～反逆のカリム～』

2000年夏、公開未定。

カリム「全て、私の計画通り」

リオス「なのはあああああッ！－！－！　何してるのでおおおおおッ！－！－！」

瑠樹「最初のも気になるけど、2番目の映画は何なんだよ……」

哲「まあ……、今は今ので……」

白「無なのです！－と書つか内容以前に公開予定がメチャクチャ
なのです！」

エルト「しかし、カリムは何処を手掛しているんだ……？」

クラウド「それはカリムに聞かない事にはどうにも、な……」

フラメ「アイツは昔から分からないヤツだからね。それはさて置き、

エルセアのメンバーがそろそろ企画を始める時間だから通信を繋げるよ。アデルー！」

ミッドチルダ西部、エルセア

アデル「はい！ こちらスタート地点です！『次元世界縦断！ウルトラダイストラベル！』がもう間も無く開始致します！」

（歓声）

アデル「ルールは簡単。予めAからEまでの5つのチームに分かれた皆様には渡してあるダイスの出目に合わせたポイントまで転移して貰い、それを続けてアルハザードまでの道を競つて頂きます」

アデル（『申し訳ありませんカレン様』）

フラメ「いよいよかあ……どんなGameになるか楽しみだね」

フラメ（『What, so? 何かあつたのか?』）

アデル「私が聞く所に因ると、途中のポイントには色々な指令やトラップが仕掛けであるとの事ですからね……気合の入っている参加者の皆様がコレをどう捌くか……私も楽しみです！」

アデル（『参加者の1人のユウ＝クロサキさんが、未だにココに着けずにノロノロと迷っているんです……』）

フラメ「そうか。それじゃあ参加者にMessageだ。Good Luck！」

フラメ（『は？ クラナガンからエルセアだろ？ 電車で30分じ

やないか』（『

アーテル「ありがとうございます！ それでは皆様、用意は宜しいですね？」

アデル（『乗るホームを間違えた挙句、何を考えたか転送ポートに乗つて別の次元世界に行つた様なんです……』）

ゲーム参加者全員「おおおおおおッ！――――――！」

フレーム（『〇〇〇……。そう言や、アイツつて方向音痴だつたな……。今何処にいるんだ？』）

アデル（『……スタッフに搜させた所、今第52管理世界にいるとの事です』）

フライ（『どういうRouteを通つたら、電車で30分の行き先が竜の巣になるんだよ……』）

アデル（『一応エルデ様が向かっていますので程無く発見出来ると
は思いますが……』）

フライメ（『OK。……こしてもまさかこんな事になるとはね』）

アデル（『申し訳ありません。私の手落ちです』）

フランメ(『No big deal・私も今まで失念してたんだ。責任はこの事を確り確認してなかつたアヴェンジャーに擦り付けりや良い』)

アーテル（『ありがとう』の意味）

フライメ（『それで良い。じゃあやるやうに話題を切るよ』）

フライ「それじゃあそつちもHeat upしてみたいたし、そろそろStartしなよ」

アデル「はい！ 皆様、それでは始めますよ！ 手持ちの巨大ダイスを転がして下さい！」

(ダイスを全員が転がす)

アデル「ええと……、成程こうなりましたか。それでは皆様、頑張つてゴールのアルハザードを目指して下さい！」

(全員が転移する)

アテル「さて……、それでは中継モニターで皆様の動きを追つて行きましょう」「う

フランク、あー、アデル。その前に質問だよ

アデル「はい、何でしょうか?」

フライメバウトレイサーとせどりの辺境をめぐるお寺へ。ヘ

ヴィレイサーく（フレームの口を押さえながら）アーテル……今のは無
視してくれゝ

アデル「あ、当たり前です！ 私がそんな事を言ひ様な女に見えますか！」

ヴィレイサー「いや、そつは言つてないだろ……」

アデル「アナタのその顔は言つたも同然の顔です！」

セレーネ「自意識過剰なんぢゃないです、ツ・ン・デ・レさん」

アデル「だ、誰がツンデレですか！ ヴィレイサー、まだこの欠陥デバイスの躊をしていないんですか！ アナタと言つ人は……！」

ヴィレイサー「…………悪かったよ。急けた事もお前を疑つた事も謝る。お前が心配で仕方無くて……つい、な」

アデル「な……なあ……！」（赤面）

セレーネ（紛つ事無きツンデレですよ、やつぱり……）

スタジオ

心愛「何と言つ惚氣……私達も負けていられません！」

白「何の勝負ですか！……」

心愛「私と白さんの間に存在する愛の深さを世間に知らしめる勝負です！」

白「そんな物は無いのです！……」

ラクス「アレが生モノのG」なのですね……」

リオス「違うから!」

ザックス「ラクス、どの方向を目指してるんだ?……」

クラウド「……分からん」

フラメ「旅と言えば、ウチの馬鹿作者は車がダメでさ。特にTaxiは乗る度に気分悪くなってるんだよね」

クラウド「その程度ならまだ良い方だ。俺の知り合いには乗るだけでアウトなヤツもいるからな」

ザックス「ああ、腐海 in the 飛空艇事件か」

シユウ「名前の時点ではオチが分かつたんですけど。大惨事以外にイメージ出来ないんですけど」

クラウド「あの時は大変だった……。番組が後日撮り直しになつてな……」

瑠樹「何があつたか気になるけど、聞かない方が良さそうだな。オチ的な意味で」

レイトス「……だな」

哲「乗り物と言えば、マイリン」

メイリン「何ですか、哲さん？」

哲「いや、『逆赤』で戦艦乗り回してるよな。しかもインメルマンターンとかバレルロールとか無茶苦茶ハイレベルな操縦技術駆使してさ。『運命』の時にはそんな描写を見なかつたから気になつてたんだけど、アレって何時身に着けたんだ?」

怜「それはアタシも気になつてたわね。簡単に身に着く物じゃないと思ひし」

メイリン「ああ……、やつぱり突っ込まれますよねえ……」

泰子「あまり話したくない事なのか?」

メイリン「いえ、そつ訳ではないんですけど……」

ルナマリア「それを話すと山あり谷あり、笑いあり涙あり感動ありの大長編スペクタクルに……」

怜「成程……。良いわ話をなくて」

哲「メイリン、何かあつたら相談してくれ……。俺らで良ければ力になるから」

泰子「あまり力にはなれんかもしけんが、いざとなつたら呼んでくれ」

メイリン「ありがとうございます、哲さん」

ルナマリア「アレは雪がそぼ降るクリスマス・イヴ。街の片隅でラ

イターを売つてその日の稼ぎを得よ」と

ケイ「いや、誰も聞いてないですから。と言つかあからりあまな捏造しないで下さいよ」

ルナマリア「チツチツチツ。アレンジって言つてよ。某小さな 子ちゃんも実話をアレンジした名作なんだから」

リオス「いや、ルナのそれはウソのレベルだから。ウソ99%に本当1%はアレンジって言わないから」

ルナマリア「何……だと……？」

その頃、ウルトラダイス・ラベル参加者

チームA

天童綾人てんどう・あやと「ダイスの目は3だから、この辺だな

ヒナギク「確かに、指定された区画内にいるスタッフの指示に従うんでしたよね？」

ファイム＝ララウェイ「そのハズですけど……あ、あそこにいましたよ！（スタッフを指差して）」

スタッフ「チームAの皆さん、お疲れ様です。早速ですが指令です」

3人（「クッ……」）

スタッフ「今から3分後に、口々を車が通ります。その時にこの紙に書かれた台詞を同時に言つて、それに合わせて出て来る相手を倒

して下さい」

ヒナギク「あ、はい」

ファイム「分かりました」

スタッフ「ええ。それでは私は次の指令があるので、コレにてドロ
ンします（姿を消す）」

綾人「また古い消え方を……」

ヒナギク「それはそうと、この台詞は……」

ファイム「色々とマズイ氣がするんですが……」

綾人「確かに……。でも、ルールだしなあ……」

ヒナギク「そういう言つてゐるウチに来ましたね……（赤くて長い車
体の車を指差して）」

綾人「……仕方無い、叫ぶぞ」

ヒナギク&ファイム「はい」

3人「せえのオ……！『お父さん、カレンさんを私に下さい。』」

男「カレンは渡さああああああんッ……！」

（車のドアを強引に開けて突っ込んで来る）

綾人「うわっ、危なッ！」

ルナギク「もうひとつー」

ファイム「わわつ！？」

(爆音と同時に男が突っ込んだビルが倒壊)

ヒナギク「（倒壊するビルを見ながら）…………アレって、もしかして……」「

綾人「もしかしなくても、フラメの父親だな……」

「…………アデルさんが陰で愚痴を零す理由が分かりました……。声や顔が渋くても、アレでは全て打ち壊しですね…………」

男「どうあれだあああッ！－！－！ ムウアイエンジエルを私から奪おうと宣戦布告して来た、命知らずはああああッ！－！－！」

綾人「はい（2人の手を握つて一緒に振る）」

ヒナギク&ファイム「！？」

男「許すアアアアアン！－！－！－！」

綾人「（バルムンクを構えつつ） オイオイ、 何か剣と盾持つて突撃して来たぞ……」

ヒナギク「（千本桜を展開しつつ）ファイムさんは下がつて下さい。あの人、あんな残念な人でも只者ではなさそうですから」

ファイム「了解です。気をつけて下さいね」

男「くあくわー」おおおおおおおッ―――」

ヒナギク「（攻撃を受け止めつつ）ツー　重い……」

男「ほお……やるなあ。だが……！」

ヒナギク「うわっ……（跳ね飛ばされる）」

男「パワーが足りんな。パワーが。そんな腕で

綾人「貰ツ……！？」

男「！」のサラマトイド＝ロットに勝てるものかあああああツ―――」

（全身から赤い衝撃波を放つ）

綾人＆ヒナギク「が……ツ！」

チームB

ブルズ「つ、強い……！」

コルト「言つてる内容は色々残念だけど、手強いのは確かだね……。
流石はあのフライメの父親だ」

ブルズ「けど、コレはある意味チャンスだ。あっちのチームには悪
いけど、！」の隙に急いで「こっちは指令をクリアしよう！」

ブルズ「だな。ユウも遅れるみたいだし、少しでもリード稼いでおかないとな。ええと……、スタッフは……（辺りを見回す）」

「コルト、あ、あそこにいた」

スタッフ「……あ。コルトさんにブルズさんですね。お待ちしておりました。」こちらが指令になります

「コルト、ありがとうございます。どれどれ……」

ブルズ「何て書いてあるんだ？」

「コルト、『地図の先に書いてある場所に行つて、そこにいる人の自己アピールを全部聞け』だつて」

ブルズ「何だそれ？まあ、戦つたりつて言つのと違つてすぐに終わるだろ？から良いいか」

「コルト、当たりを引いたって考えて良いのかな？早く行こう、ブルズ」

（それから20分後）

「コルト、……つて、思つてた時期が僕にもありました……」

ブルズ「まさか、こんなに長々と自分の事を話すヤツがいたなんて……」

モント「（前略）好きな曲は聞いた事ねえですけど『403』の『Blaze of life』。好きな言葉は金声玉振。きんせいぎょくしん 趣味は空

間「コーディネートと髪の毛の手入れ。最近は植物栽培にハマつてん
ですけど、中でもトリカブトとキヨウチクトウの育成には自信があ
ります。そうそう。そう言えば最近になつて武器集めを始めたんで
すけど、やっぱり斧は刃の角度が大事ですね。それを分かつてねえ
ヤツは

「

「コルト」「いるんだね……。放つて置くと延々自分の事を話す人つて
……（バタツ）」

ブルズ「誰か……アイツの自己紹介を止めてくれ……（ガクツ）」
チームC

セロ＝スクライア「（間一髪で飛んで来たボールをかわしつつ）の
わっ！ 危なッ！」

デミル＝オズマ「（足元を確認して）ツ、トリモチか……しかも臭
い……」

ザラックく（頭にバケツを被りびしょ濡れになりながら）仮にも歴
史に名を残す聖王の癖に、随分と悪辣な事をしてくれるな……！」

セロ「『初代聖王・エレオノーレ＝ゼーゲブレヒトを捕まえて、持
つているカードを奪い取れ』……か。全く、とんだ外れクジを引い
たな……」

デミル「まさか彼女のいる森に入るなり罷の洗礼を受けるなんて思
わなかつたよ……ん？ 何コレ？」

（星型の石を拾おうとする）

ザラック「待て！ 迂闊に触……」

（拾つた瞬間爆発。それと同時に、大量のチョークの粉が辺りを包み込む）

セロ「ゲホッゲホッゲホッゲホッゲホッ……！」

ザラックくクツ、視界が……！」>

エレオノーレ「罵に掛かって頂き、ありがとうございます！」

デミル「！」の声は……！」

ザラックく来たか……！」>

エレオノーレ「（高い木の上に立て）赤い血潮を身体に流し！
オレンジタ日を背に浴びる！ 黄色い歓声人気者、フレッシュグリーンいざ参る！」

（ポーズを取る度に次々にカラフルな爆発が背後に起る）

セロ「ザラック……彼女つて、初代聖王……」

デミル「資料では、騎士の鑑と謳われた……」

ザラックく言うな……。俺もアレが聖王だなどと言つ事實を、何かの間違いだと思いたいのだ……！」

エレオノーレ「その身を守るは青き衣イエロードレス！ 藍色紫何かイイ！ 虹色纏つた！ その名も……」

3人一（一斉攻撃）

エレオノーレ「わわっ！？ わっ、わっ！…！」

（バランスを崩しながらも地面に着地）

エレオノーレ「い、いきなり何をするんですか！ 名乗りの最中だつたと言つのに…」

3人「何処の戦隊ヒーロー！？ たつた1人なのに長過ぎるだろ（でしょう）！」

エレオノーレ「大晦日スペシャルバージョンです。3日掛けてリハも完璧にした傑作だつたんですよ」

セロ「勿体無い！ 時間が勿体無い！」

エレオノーレ「なッ！？ ……わ、私の努力が無駄だと言つんですか！？」

ザラックくそんな事はどうでも良い。エレオノーレ、持っている力一ドを渡して貰おつゝ

エレオノーレ「い・や・で・す。今さつきの呪詞のせいで渡す気を無くしましたー」

デミル「子供ですか！」

エレオノーレ「どうしてもと言つのでしたら、私を倒してから奪い

取つてみて下せ。……出来れば、ですが

(Hレオノーレの背後の空間が歪み、無数の武器がそこから現れる)

セロ&テミル「…?」

ザラックく来たか……。ヤツの稀少技能、幻想宝物が……！
お前達、こうなつたら死ぬ氣で掛かれ！」

セロ「ああ…」

デミル「はい…」

エレオノーレ「ああ、行きますよ…」

チームD

クロスロード＝ナカジマ「今の所は僕らが一番乗り、か

ノア＝ナカジマ「マスター、このままパーティと仮血斬……基、ぶつち
きつけられこましょつ…」

クロス「今なんか物騒な言葉が聞こえた様な…」

ノア「やだなあマスター。幻聴ですよ

クロス「……だろうね、うん。けじこの指令……（渡された紙を見ながら）

ノア「フランの叔母さん……つまりさつきのHレオノーレのお母さんから先に行くのに必要なカードを貰つ、でしたよね？」

クロス「うそ。でもわたくしのアレを観てたら、何だか不安になつて来て……」

ノア「…………た、多分大丈夫ですよ！ 何だかんだでエレオノーレさんとは会話が成立してましたし！」

クロス「やうであつて欲しいなあ……あ、着いた。綺麗な城だなあ……」

ノア「森の中の丘畠の城つて、オシャレですよね……」

女性「いらっしゃい」

クロス「じゃあ、ええと……、『エリノア＝ゼーゲブレヒトさんですか？』

エリノア「ええ、そうよ。アナタ達がクロスロード君とノアちゃんよね？」

クロス「あ、はい」

ノア「宜しくお願ひします」

エリノア「（お辞儀をしながら）いらっしゃい宜しくねー」

クロス（『良かつた……。思い切り普通の人だ。しかもホンワカした優しそうな感じの』）

ノア（『当たりを引きましたね、マスター』）

エリノア「年末お疲れ様。えーと、カードだったわね」

クロス「あ、はい」

エリノア「それじゃあどうぞ……って言いたいんだけど、少し条件があるわ」

クロス「何ですか？」

エリノア「カードは、私の書斎の中にある本の表にしてあるの。大量の本の中からそれを探すのが私からの条件よ」

ノア「探知魔法とかは使って良いんですね？」

エリノア「勿論 2人共、頑張ってね」

クロス＆ノア「はい！」

(城内に入る)

従者「あ、エリノア様。尋ねて来られた企画参加の方はどうぞいらっしゃりますか？」

エリノア「あの子達ならお城の中に行つたわ。元氣があるつて良いわね～」

従者「ダメでしょう入れては！」

エリノア「何で？」

従者「何時も申し上げていますが、あの城にはエリノア様をお守りする為に我々従者以外を排除するトラップが仕掛けられているんです！ 今すぐ解除の術式を施さないと……」

エリノア「あー……」

クロス＆ノア「うわあああああッ！……！」

（爆音と何かが崩れる音が響く）

従者「大丈夫ですかあああああッ！……！」

チームE

シキ＝K＝クロカミアスター（モニターを確認しながら）ふむ……彼女も“ハズレ”だつたか

蒼月竜哉「オレは最初から嫌な予感がしてたよ……。天然っぽかつたからな、さつきの人」

天戸翔「だよな……。ああ言うタイプの人間って下手に賢いヤツより性質悪かつたりするからな……」

竜哉「100%善意なせいで糾弾し辛いってのもあるしなあ……。アレならまだテメエの事しか考えてねえヤツと会話する方がマジだな」

翔「どうで話は変わるけども、ミッドチルダって色々なヤツがいるよな」

竜哉「ホントにガラリと内容変えやがったな……。まあ確かに色んなヤツがいるし、来てやがるよな」

翔「それで不思議なのが、そいつらの多くが全身装甲みたいなデバイスを持つてるつて事だな。こないだフェイトから聞いた話じゃ、持ち主共々戦闘機みたいな形に変形するデバイスを持つた次元漂流者がいたらしいぜ」

竜哉「それなら俺もディエチから聞いた。何でもカリムにセクハラしようとしたパンダイブした所を投げ槍の一撃で叩き落とされたんだつてな」

翔「ああ。何か“俺の知ってるカリムと違う”とか言ってたらしいけど、どーいう事なんだろうな?」

竜哉「さあな。まあイタイ電波を受信した野郎の頭の中なんか興味ねえや。スカリエッティのヤツはそいつの持つてた『アリオス』つてデバイスに無茶苦茶興味あつたらしくて拘置所内でテンション上げてたらしいけど」

翔「看守の苦労が目に浮かぶ様だ……」

シキ「こほん。2人共、雑談に花を咲かせている所申し訳無いのだが……あちらの2人を止めるのを手伝つてはくれないか? でないと我々は何時まで経つてもココから先に進めないのだが……」

セフィロス「(前略) イカにはダイオウイカと呼ばれる非常に巨大な種が存在しているが、タコにはそれと肩を並べるに足る存在はない。コレが優劣の決定的な差でなくて何だと言うのだ?」

ドンナー「は、タダでつかいだけで勝ったとか笑わせないでよ。タコには高度な擬態能力があるし、自分で殻を作れるのだっているのよ。それにイカは小魚みたいな弱いのがメインだけど、タコはウニやサザエもカニも殻を噛み碎いて食べてる。どっちの方が器用かつ逞しいかなんて一目瞭然でしょ？」

セフィロス「愚かな。気の合わぬ輩が同じ水槽にいるだけで気が狂つて己の脚を食む様な薄弱な精神の生き物が逞しいとは」

ドンナー「水揚げされた時点で生きてられない様なダイオウイカに比べたら万倍凄いわよ。そもそもタコはあんな肉の塊みたいな姿にはならないもの。て言つかあの外見、イカなんか比べ物になんない位可愛いし」

セフィロス「フッ……ゲッソーも知らん小娘が。アレに比肩する愛嬌のある容姿を持つたマスコットなど、デビルフィッシュ悪魔の魚の中には存在するまい」

ドンナー「アンタ……、今言つちゃいけない事を……！ そんなにイカのフルコースにされたいのなら、望み通りにしてやるわよ！」

セフィロス「クッククック……斬り捨ててワサビ醤油で食してくれる」

翔「おいちょっと待て落ち着けお前らー！」

竜哉「つーかイカもタコも元々はコウモリダコって言つ生き物から派生しただけの仲間だ……」

セフィロス&ダンナー「一緒にするな……。」

(息ピッタリの同時攻撃)

翔&竜哉「わあああああッ…………」

シキ（間一髪避けた）「…………済まない。不毛な争いを延々聞かされ続けたせいで精神的な疲労が……。辞退させては貰えないだろうか」スタジオ

ゲスト全員「…………」

ルナマリア「私が言つのもアレだけどさ、凄いカオスよね…………」

ラクス「聖王家と聖王正教つて、まともな人がいませんわね…………」

シュウ「それ、ラクスさんの言えた台詞じゃないです」

泰子「君らも彼らに負けず劣らずの変人だからな」

ラクス「私は普通の心算なのですが…………。この思考はアグニンジャーー…………駄作製造機と同じですから」

リオス「いや、まずアグニンジャーが変なんだと認識しようよ」

フラメ「（頭を抱えながら）…………アデル、後でのDad…………Fucking dandoにて伝言頼む」

アデル「畏まりました。伝言内容はどの様に?」

フラメ「……放送禁止用語の連発になるからMailで伝えるよ。まあ5文字で言うなら“ブチ カク”って所だけね」

アデル「了解しました。……私からサラママイド様 バカダンディーへの罵倒も付け加えて宜しいでしょうか？」

フラメ「Of course 来年一杯引き籠る位の精神的Damageを与えてやつてくれ。今から綾人達に助つ人しに行かなきゃならないし」

アデル「カレン様……精神的な意味で御武運を」

フラメ「Thank you……。メイリン、私はちょっと綾人達を助けて来る。その後は多分……いや確実に戦闘不能になつて司会どころじゃないから、エルデが代わりに来るまでの間だけルナとラクスを頼む」

メイリン「分かりました。その……私で良ければ相談に乗りますから、元気出して下さいね」

フラメ「Thank you……」

(フラメが転移)

チームA

サラママイド「ハハハハハ！ 温い！ 温いぞ！」

(剣を振つて魔力斬撃を飛ばす)

ヒナギク「クッ……、強過ぎる……。しつちの攻撃がまるで通用し

ないなんて……」

綾人「（後ろで倒壊するビルを見ながら）攻撃力も半端じゃない……。あんなの1発でも喰らつたらアウトだ……！」

ヒナギク「コレは……本格的に詰みですかね……」

綾人「全く……何でこんな事に……」

ヒナギク「アナタのせいでしょう……。台詞だけで良このに煽るから！」

サラマード「それなら止めを刺してやる……。私のレンレンを嫁に賣おうとしたその度胸を買つて、一撃で決めてやる

デバイスくフルドライヴへ

サラマード「はあああああああッ……！」

フランメ（『綾人、ヒナギク。今から私が援護してやる。アレの動きを一瞬だけ止めてやるから、その隙に全力の攻撃をヤツに叩き込め』）

綾人（『良いのか？…………なんて聞いてる暇は無さそうだな。分かった』）

ヒナギク（『ありがと「わざこまわ』）

サラマード「とおじ……」

フラメ（『（思い切りぶついた口調で） Daddy、大好き
I love you』）

サラママイド「！？ レンレンの声！？」

（攻撃を中断して周囲を見回す）

綾人＆ヒナギク「今だ！－！」

（同時攻撃）

サラママイド「え？ ちよつ、待つ…… のわああああああッ－－.
－－！」

（爆発に呑まれる）

綾人「か、勝つた……」

ヒナギク「（氣絶しているサラママイドを見ながら） 何でマヌケな勝
ち方…… でも取り敢えずコレで先に進めますね」

ヒナギク（『フラメさん、ありがとござります』）

フラメ（『ビ、びつ致しまして……。シチュ……気分が悪くなっ
て来た……。おえええ……』）

綾人（『その……、済まない……』）

フラメ（『頼む2人共……。今の台詞の事は黙つてくれ……』）

綾人（『わ、分かった……』）

ヒナギク（『分かりました……』）

綾人（『けどさ、アレ後でもう一回やつてくれないか?』）

フライメ（『ー?』）

ファイム「何かあつたんですか?」

綾人&ヒナギク「いや、何でも」

ファイム「?」

チームC

一方その頃、セロ&ザラック&デミル

ザラック（降り注ぐ武器の雨を避けながら）クソ……！まるで隙が見当たらん

セロ（全力で障壁を展開しながら）攻撃を避けてるのに……、余波だけでダメージが……

デミル（障壁を打ち破られて）グツ……！済まない……僕は口までみたいだ……

セロ「デミル！ クツ……！」

エレオノーレ「フツフツフ……。コレで私の勝ちね。最後はカツコ

良く決めてあげます…… エクスカリバー！ ロンゴミアントー！」

エクスカリバー & ロンゴミアント <御意>

エレオノーレ 「ウェポン・バルカ
武具融合 デルフィロス 始原の業火！」

セロ「アレは……！」

ザラックくグツ……！」

エレオノーレ「行きますよ……！」

セロ「……ッ！」

エレオノーレ「ファイナルタキオンガーディアンズギャラクシーバーニング」

セロ「（斬り付けながら）技名が長い！」

エレオノーレ「グツ……！ なら、ハイパー エターナルビッグバンフォース……」

セロ「アイス・エッジ！」

エレオノーレ「嘘あおおおおおッー？」

エクスカリバー「だから技名は簡潔にして下さいと申し上げたのに

……！」

ザラックく手に屁を握る様な結末になってしまったな……ともあれ

オチ

「レで先に進め……」

アデル「ああ、済みません。そちらが長々と戦っているウチにゴールした人が出ました」

ザラック「何!? 何処の誰だ!」

チームA

綾人「もうゴールしたヤツが? 早いな……」

ヒナギク「アデルさん、誰なんですか?」

アデル「……チームBのユウ=クロサキさんです……。道に迷つていた所をエル[♂]様に連れられて此処エルセアに着いたのですが、ゲーム開始と同時に持ち前の方向音痴スキルを発揮してアルハザードに……」

綾人「ミラクル過ぎるな……」

（回想）

ユウ=クロサキ「ココは何処だ……? 面倒臭えけど調べるか……」

（別の次元世界の地図を逆さに見ながら）

ユウ「えーと……学園都市の第三学区か。クソ、まだ歩かねえといけねえのか……面倒臭えなあ……」

アデル「もうアルハザードにゴールしてるので何処に行く気ですか

……取り敢えずアナタのチームが優勝したのでエルセアに戻します
よ^

コウ「マジか！？」 そう言ひやヤケに寂れてんなとは思つたけども…
…転送頼むわ

(コウが転移)

ラクス「…………あちらも終わった様ですわね」

メイリン「ですね。丁度年も明けますし、一日全体休憩にして年明けを待ちましょうか」

ルナマリア「それが良いわね。皆もそれで良い？」

クラウド「異論な無い」

白「右と同じなのです」

リオス「僕も賛成だよ」

ラクス「では、今年はココまでとしましちゃつ。皆様、良いお年を」

(後書き)

「「「もで読んで頂き、本当にあつがいありがとうございました。」

次は明日（2012年1月1日）の13時に投稿された御正月特番
「カオス色シンフォニー」でお会いしましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6470z/>

大晦日特番「Narou/Zero」

2011年12月31日22時46分発行